

## 【研究ノート】

## トルコ共和国イスタンブール市内にあるファーティフ・スルターン・ムハンマド時代のふたつの碑文

井谷 鋼造

## はじめに

ファーティフ・スルターン・ムハンマド（現代トルコ語では、「メフメト」）は、オスマーン帝国の第7代目のスルターンで、その別名「ファーティフ」（アラビア語で「征服者」）が意味するように、アナトリア各地や、特に現在のトルコ共和国第一の都市である、イスタンブールの征服者として名高い。イスタンブールの町は、黒海とマルマラ海をつなぐボスポロス（ボスフォラス）海峡に面し、かつて、ビュザンティオン、ビザンティウム (Byzantion, Byzantium) として古典古代の地中海世界に知られたギリシアの植民市であったが、西暦330年ローマ皇帝コンスタンティノスがこの地に遷都して、都市機能を拡充し、自身の名にちなんで、コンスタンティノポリスと改名した。この名前のアラビア語形が「クスタンティーニーヤ」（قسطنطينية）である。この町は、12世紀頃から、ギリシア語で「町へ」を意味することばに由来すると考えられる「イスタンブール」または「スィターンブール」（استانبول | ستانبول）という形で、アラビア語やペルシア語の文献に現れるようになる。これが現在のイスタンブールという呼称の起源であり、オスマーン帝国時代にこの呼称が定着した。また、イスタンブールという名前の綴りを少し改変し、「イスラームの町」の意味になる、「イスラームブール」（اسلامبول）という呼び名が用いられることもあった。一方では、オスマーン帝国時代にも、雅号として「クスタンティーニーヤ」の名称が用いられ続けたのであり、ある時期に正式な改名がおこなわれて、旧名が完全に忘れ去られたというわけではない。現在でも、ギリシアではこの町を「コンスタンティノポリ」と呼んでいる。

クスタンティーニーヤ＝イスタンブールがオスマーン帝国のファーティフ・

スルターン・ムハンマド(メフメト) 2世によって征服されたのは、西暦1453年のことであり、これを機にオスマーン帝国は、15世紀後半と16世紀を通じて勢力・版図を一層拡大し、ヨーロッパ、アジア、アフリカの3大陸に跨る大帝國を形成することになる。大帝國の首都としてイスタンブルには、多数の壮麗な宮殿、マスジド(礼拝所)、マドラサ(学校)、マクバラ/トゥルバ(墓廟)ハンマーム(公衆浴場)、クトゥブハーナ(図書館)、イマーラト(福祉施設)、チャルシュ/ベデステン(固定式店舗が連なる市場)などが歴代のスルターンや王族、有力者たちによって建設され、それらの中には、現在もイスタンブルの歴史的な景観を代表し、この地を訪れる多くの観光客が立ち寄る場所も少なくない。

第1次世界大戦の敗北を契機として、オスマーン帝国は解体に瀕し、アラブ地域は現在のスーリヤー(シリア)、ウルドゥンヌ(ヨルダン)、ルブナーン(レバノン)、イラクなどに分裂して独立し、残るアナトリアと、東トラキアが、ムスタファー・ケマル・パシャ(アタチュルク)の指導する「解放戦争」の結果、1923年に現在のトルコ共和国(Türkiye Cumhuriyeti)を形成することとなった。トルコ共和国は、イスタンブルに代わって、内陸のアンカラを新首都として選定し、共和国の首都の機能は、漸次イスタンブルからアンカラに移されて、現在に至っている。すなわち、現在イスタンブルは、トルコ共和国の首都ではない。しかし、人口や経済力の面で、イスタンブルは現在も抜きん出た状態で、トルコ共和国第1の都市であり、イスタンブルを抜きにしては、あらゆる面でトルコを語れないような状況は、現在も変わっていない。

本稿では、オスマーン帝国の首都としての、歴史都市イスタンブルに現在も残る、ファーティフ時代に建設されたことが明らかな、ふたつの有名な建築物である、ファーティフ・ジャーミウとトプカプ宮殿の正門である、「バーブ・フマーユーン」に残る、それらの竣工や定礎を記録した碑文を紹介し、歴史資料としてのそれらの価値を考察してみたい。

## 1. ファーティフ・ジャーミウの竣工碑文

ファーティフ・ジャーミウは、イスタンブルの旧市街、ヴァレンス水道橋の遺跡を少し西へ行った小高い丘の上にある。かつての東ローマ帝国(ビザンティン)帝国の時代、この場所には、「聖使徒教会」と呼ばれるキリ

スト教の聖堂があったが、その跡地に建設されたのが、現在のファーティフ・ジャーミウである。このジャーミウ（ジャーミウとは、ムスリムにとって、1週間で最も重要な、金曜日正午過ぎの礼拝がおこなわれる、大規模な礼拝所=マスジドのことである。）の存在に由来して、このジャーミウのある一帯が、現在ではファーティフ地区と呼ばれている。オスマーン帝国時代、西暦18世紀後半のイスタンブルのマスジド、ジャーミウを網羅的に解説した、ハーフィズ・ヒュセイン・アイヴァンサライーの著作である *حديقة الجوامع* によると、ファーティフ・ジャーミウは「マーリー（財務）暦1179年5月11日、クルバーン・バイラム（犠牲祭）の三日目の木曜日（1766.5.22）、日出から1時間後に起こった大地震により、完全に倒壊した」という。（Hafiz Hüseyin al-Ayvansarayi, (tr.) Howard Crane, *The Garden of the Mosques*, Brill, 2000, p. 12）この記事から明らかのように、現在のファーティフ・ジャーミウの建物は、地震後に再建されたものである。しかし、中庭に通じる、西面する、建物本体への入口に向かって右→中央→左の順に連続する、もとのジャーミウの竣工を記録した碑文は、再建後の建物にそのまま残された。（写真1-3）

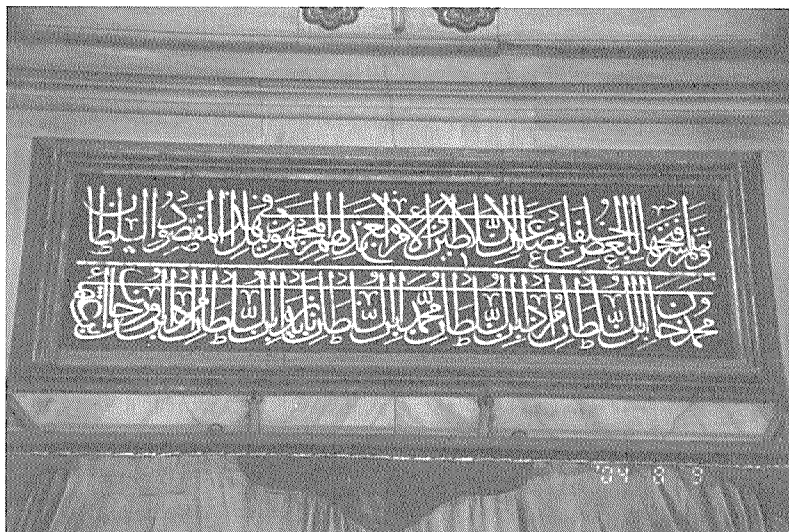


写真1 ファーティフ・ジャーミウ入口正面の碑文

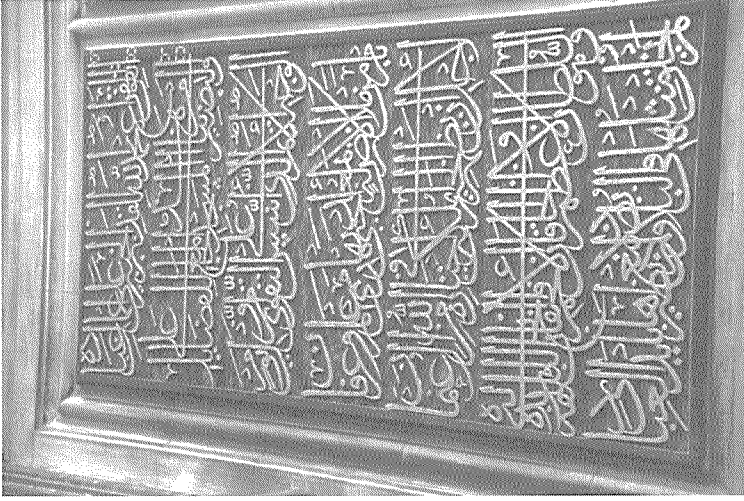


写真2 ファーティフ・ジャミーウ入口右側の碑文



写真3 ファーティフ・ジャミーウ入口左側の碑文

以下に提示するのが、碑文のアラビア語原文である。(以下、原文中の縦線は、改行を示している。)

[入口に向かって右側の碑文]

اتفق الفراغ بحمد الله القدير الخبير على أعمال عباده | والبصير من بناء هذا المسجد الجامع للفضائل  
على | الوجه الأتم الذي أسس على التقوى من أول يوم | بأمر من ملأ الارض بمعدلة احبى بها رمى  
علم وعرفان | لأجل ان يظهر الخيرات في ملكه اختاره الله من آل عثمان | وهو السلطان الأعظم  
الخاقان الأفخم الفاتح بسيفه هذه البلدة التي | لم يخلق مثلها في البلاد ولم يصنع نظيرها بأيدي العباد

[入口上方の碑文]

ولم يتيسر فتحها لبعض الخلفاء فضلاء عن السلاطين والأمراء مع بذلهم المجهود في نيل هذا المقصود  
السلطان | محمد خان ابن السلطان مراد ابن السلطان محمد ابن السلطان بايزيد ابن السلطان مراد ابن  
اورخان ابن عثمان

[入口に向かって左側の碑文]

لا زالت سرادقات جلاله مصحوبة بألطف الرحمن | ولا خلا سدته السنية في كل حين وأوان من  
الأولاد | والأنصار والأعوان وأفاض الله تعالى على أسلافه | سجال الغفران وأسكنهم أعلى غرف  
الجنان | دعائي هذا للبرية نافع فيرحم الله عبدا قال آمينا | في الشهر المبارك رجب لسنة خمس  
وسبعين وثمانماية وقد كان | البداية في جمادى الأخرى لسنة سبع وستين وثمانماية كتبه علي بن  
صوفي

(日本語訳)

最初の日から、敬虔さに基礎づけられた、より完全な姿で、秀逸さを集める、このマスジドの建設は、その僕たちの行為を全て知り、全て見通す、全能の神の称賛を以て、その王権において善行を顕すために、大地を公正さで満たし、それによって、知識や真知の腐骨を復活させた者、神がウスマーン家のうちから選んだ者、の命令で仕上げられた。その者とは、最大のスルターン、最も卓越したハーカーンであり、僕たちの手でその類例が諸国に造られたことがなく、幾人かのハリーフアたちや優れたスルターンたち、アミールたちが、目標の獲得に努力を傾けたにもかかわらず、その征服が叶わなかったこの町を、その剣で征服した者（ファーティフ）、アッスルターン・

ムハンマド・ハーン・イブン・アッスルターン・ムラード・イブン・アッスルターン・ムハンマド・イブン・アッスルターン・バーヤズィード・イブン・アッスルターン・ムラード・イブン・ウールハーン・イブン・ウスマーン—彼の栄光の大天幕が常に、慈悲深い者（神）の恩恵に伴われ、その高い敷居が何時いかなる時も、子孫や援助者を欠くことがなく、至高なる神が、彼の祖先たちに赦しの贈り物をあふれさせ、彼らを楽園の最高の部屋に住ませるように—のことである。被造物のための、私のこの祈りは有益であり、神は、アーミンと言った、一人の僕に慈悲を与える。（建物の完成は）875年の祝福されたラジャブ月（1470年12月/1471年1月）であり、（建設の）開始は、867年のジュマダーⅡ月（1463年2/3月）であった。これを書いたのは、アリー・ブン・スーフィーである。

（解説）

筆者は、2004年8月9日に、このジャーミウを訪れて碑文を実地に調査したが、上記の原文、日本語訳を提示するに当たっては、オスマーン朝初期の、現存する碑文類を網羅的に調査・採録していると思われる、Abdülhamit Tüfekçioğlu, *Erken dönem Osmanlı Mimarisinde Yazı*, Ankara, 2001.（『初期オスマーン朝建築物における文字』）を参照した。上記のアラビア語原文は、同書の343頁に掲載されている。この書物は、計134箇所（のオスマーン朝初期の各種建造物（建物が現存しない場合もある））に残されたアラビア文字の碑文・刻文・銘文を写真付きで紹介し、それぞれの碑文について、アラビア文字原文、現代トルコ語訳と解説が付されている。多少の誤植が見られることを除いては、しっかりした解読結果が収録されており、今後の碑文研究の模範的な基準を提供するものであるように思われる。筆者もこの書物から、解読の不明箇所をはじめ、多くの教示を受けた。

この碑文の中では、「ムハンマド（2世）—ムラード（2世）—ムハンマド（1世）—バーヤズィード（1世）—ムラード（1世）—ウールハーン—ウスマーン」という、ファーティフに至る7人のオスマーン（原文では、ウスマーン）家スルターンの系譜が、漏らさず、全て記されており、ムラード1世からはすべて「スルターン」の称号が付されている。上記のTüfekçioğluの書物に挙げられた建築物と碑文・銘文などの中で、この碑文以前のもの（計102点）に、オスマーンに始まる支配者の系譜が全て現れる碑文はない。これ以

後の時代のものでは、イスタンブル所在の、スュレイマニエ・ジャーミウ（1557年10月完成）やスルターン・アフメド・ジャーミウ（1616年10月完成）などの規模が大きく、また観光地としても有名な大ジャーミウでは、ファティフと同じく、建物の入口正面の上方に掲げられた、建築の定礎と竣工を記録する碑文の中で、それぞれの建築物を建てさせたスルターンたちの系譜が、初代のオスマーンまで遡って現れている。スュレイマニエでは、オスマーンよりスライマーン1世に至る10名のスルターンの系譜が、スルターン・アフメドでは、アフメド1世に至る14名のスルターンの系譜が、それぞれの碑文中に記録されている。その意味では、ファティフ・ジャーミウの竣工碑文は、以後のスュレイマニエやスルターン・アフメドにもその形式が継承される、オスマーン家のスルターンの系譜をもれなく記録した、最初の碑文であるということができる。

また、碑文中で、ファティフは「アッスルターン・ムハンマド・ハーン」と呼ばれており、オスマーン家のスルターンが、公式に「ハーン」という称号を使用していたことは明らかである。彼はまた、「最大のスルターン、最も卓越したハーカーン」として、ムスリムの支配者としての「スルターン」という称号と並んで、トゥルクの帝王たる「ハーカーン」の称号をも使用している。「僕たちの手でその類例が諸国に造られたことがなく、幾人かのハリーファたちや優れたスルターンたち、アミールたちが、目標の獲得に努力を傾けたにもかかわらず、その征服が叶わなかったこの町」とは、具体的な名前が挙げられていないにもかかわらず、世界に無比のビザンティン（自称はローマ）帝国の都クスタンティーニーヤ＝イスタンブルを指すことは明白であり、古くは、西暦7世紀のウマイヤ朝初期の時代以来、ムスリム諸王朝のハリーファ、スルターン、アミールたちが、この町の征服をめざしながら、叶わなかったことを簡潔ながら、的確な表現で述べているのである。オスマーン朝の「最大のスルターン、最も卓越したハーカーン」であるだけでなく、世界の歴史上にその名を輝かせてきた、クスタンティーニーヤ＝イスタンブルの征服者（ファティフ）という名声が、スルターン・ムハンマドを最も有名にしていた属性であり、ムハンマドに付された「その剣により、この町を征服した」という修飾表現が、この碑文中で最も強調されるべき部分であったことは、疑いを容れない。

スルターン・ムハンマドの名の後に付けられた讃辞（\_\_\_\_\_の部分）では、スルターン本人への神の恩寵、その子孫たちの繁栄、その祖先たちの冥福が祈願されており、これに類する表現は、イスタンブルのシュレイマニエやスルターン・アフメドのような、他の有名なジャーミウの竣工碑文の中でも見られる。

この碑文を書いたとされる、アリー・ブン・スーフイーはファーティフ時代の有名な能書家であり、次に紹介する、バーブ・フマーユーンの碑文もまた、彼の作品である。ファーティフ・ジャーミウ及びバーブ・フマーユーンのアリー・ブン・スーフイー作の碑文は、その内容の歴史的な重要性だけではなく、「ジャリー・スルス」書体の頂点を極めた作品として、芸術的にも高く評価されている。アリー・ブン・スーフイーについては、*Yaşamları ve Yapıtlarıyla Osmanlılar Ansiklopedisi*, Cilt 1, İstanbul, 1999. s. 235. を参照。

## 2. バーブ・フマーユーンの碑文

イスタンブルの観光名所のひとつである、オスマーン帝国の歴代スルターンたちの居城であった、通称トプカプ宮殿の正門が、「バーブ・フマーユーン」である。現在この門は、宮殿そのものへの入場門ではなく、入場門へと続く、人や車両が頻繁に出入りする通過点となっているが、アヤ・ソフヤ（ビザンティン時代の「ハギア・ソフィア大聖堂」）であり、イスタンブルの征服後は、ジャーミウとして Muslims の礼拝の場となった。現在は、博物館）の背後に位置し、この門からはマルマラ海側へ延々と城壁が延びていることから、宮殿の正門であったことがわかる。この門の前には、アフメド3世の給水場（1728年完成）があり、この建物も歴史的に重要なものである。バーブ・フマーユーンは石造で、その南面する門のアーチ奥の壁に、以下のようなアラビア語の碑文が掲げられている。（写真4）



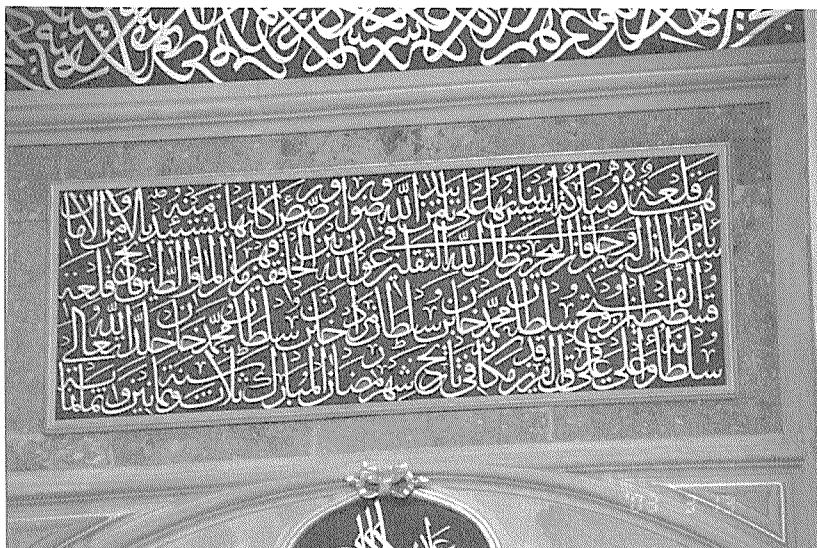


写真4 パープ・フマーユーンの碑文

هذه قلعة مباركة أسس بنائها على تأييد من الله ورضوان وحرص أركانها بتشييد منه بالأمن والأمان | بأمر  
 سلطان البرين وخابان البحرين ظل الله في الثقيلين عون الله بين الخافقين قهرمان الماء والطين فاتح قلعة |  
 قسطنطين أبو الفتح سلطان محمد خان بن سلطان مراد خان بن سلطان محمد خان خلد الله تعالى | سلطانه وأعلى  
 على فرق الفرقدين مكانه في تأريخ شهر رمضان المبارك سنة ثلاث وثمانين وثمانمائة

(日本語訳)

これは、二つの陸のスルターン、二つの海のハーカーン、人とジンの両界  
における神の影、東西の間において神を助ける者、水と泥の英雄、クスタン  
ティーンの城塞の征服者（ファーティフ）、アブルファトフ・スルターン・ム  
ハンマド・ハーン・ブン・スルターン・ムラド・ハーン・ビン・スルター  
ン・ムハンマド・ハーン 至高なる神が彼の権力を永遠ならしめ、彼の位置  
を二つの指極星の頂へと高めるようにの命令で、883年の祝福されたラマ  
 ダーン月（1478年11/12月）に、その建設が神の後援と是認の上で基礎づけ  
 られ、その柱石が神の安全と保護の確保によって打ち固められた、祝福され  
 たる城塞である。

(解説)

この碑文は、上で紹介した、Tüfekçioğluの書物365頁に採録されてい

る。オスマーン帝国の歴代スルターンたちが、イスタンブルで居城とした「トプカプ宮殿」を建設した際の碑文で、これ以降のスルターンたちは、この碑文に現れる「二つの陸のスルターン、二つの海のハーカーン」という称号を公式に名乗った。これは、ファーティフの治世以降の貨幣銘文などからも確認できる。この碑文に現れる、ムハンマド（メフメト）1世—ムラード2世—ムハンマド（メフメト）2世は、全て「スルターン」と「ハーン」号を付けて表現されていることに注目したい。しかし、おそらくは、碑文の表現スペースの限界ゆえか、前掲ファーティフ・ジャーミウの竣工碑文のように、ここではオスマーンに始まる、ムハンマド1世の父、バーヤズィード1世までの4人の祖先の名前は載せられていない。碑文中で「クスタンティーンの城塞の征服者（ファーティフ）」とされる、ムハンマドの名に付せられた、「アブルファトフ」はムハンマドのクンヤであるが、ここでは「征服の父」という意味の、西暦11世紀のセルジューク朝のスルターン、マリクシャーフ以来多くの支配者たちによって使用されてきた、多分に定型句化された表現で、ムハンマドの父ムラード2世や、ムハンマドの子バーヤズィード2世が同じクンヤをもって呼ばれる、碑文の実例も存在する。（Tüfekçioğlu, 206, 407-8, いずれもアマサヤ市内のジャーミウの碑文で、前者は、834年ムハッラム月朔日（1430.9.19.）、後者は、891年ラジャブ月（1486.7.3.-8.1.）にそれぞれ竣工したことがわかる。）

「二つの陸のスルターン、二つの海のハーカーン、人とジンの（両界）における神の影、東西の間において神を助ける者」という一連の表現は、4つのアラビア語双数形属格の名詞を用いて表現されており、二つの陸（البرين）、二つの海（البحرين）、人とジン（التقلين）、東西（الخافقين）がそれぞれである。「ジン」とは、イスラームの文脈で、神によって火から創造された超自然的な存在のことであり、イスラームの聖典『クルアーン』第55章（アッラフマーン）31節の末尾に、人間とジンをセットにした、この双数形が用いられている。ファーティフ・スルターン・ムハンマドに関して用いられる「二つの陸」および、「二つの海」という表現は、単なる修辞というよりも、二つの陸=アナトリアとルーメリ、二つの海=黒海と地中海、という具体的な二つの海洋と二つの陸地を表わしていると考えられる。

「二つの陸のスルターン、二つの海のハーカーン」という表現は、上述の

ように、ファーティフ以後のオスマーン朝のスルターンたちの称号として用いられるようになった。一例を挙げれば、ファーティフの後継者である、バーズィード2世時代の碑文にもこの表現が見られる。(抽稿「イスラーム世界の市場についての一考察」2004年度追手門学院大学共同研究・研究成果報告書『アジアの市場(いちば)の現状と背景——ヒトとモノの出会いと交流——』2005年3月, 53頁参照。)しかし、Tüfekçioğluの書物や、私自身の7年にわたるこれまでの碑文調査経験を参考にしても、バーブ・フマーユーンの碑文以前に、「二つの陸のスルターン、二つの海のハーカーン」という表現が用いられたオスマーン朝期の碑文・銘文などの例は見当たらない。その意味では、バーブ・フマーユーンの碑文中に見られる「二つの陸のスルターン、二つの海のハーカーン」という表現は、ムスリムにとって空前の偉業となる、帝都クスタンティーニーヤ征服を達成し、アナトリアとルーメリ(バルカン半島)の両土にまたがる大帝国を形成し、黒海と地中海の両海を制覇せんとしていた、ファーティフ時代のオスマーン帝国の強大化や発展を象徴的に示したものの、ということができるのである。

なお、バーブ・フマーユーンの碑文については、アンドレ・クロワ著、岩永博/井上裕子/佐藤夏生/新川雅子訳『メフメト二世 トルコの征服王』法政大学出版局、1998年の304-6頁に内容が紹介されているものの、原文を対照した正確な日本語訳ではない。

(本稿は、平成16年度科学研究費補助金・基盤研究(B)、研究課題「「アレヴィー・ベクタシ」集団のエスニシティと社会的文化的秩序の変化と持続——トルコ・ヨーロッパにおけるトルコ系集団を中心にして——」(研究代表者:大阪国際大学・佐島隆教授)による研究成果の一部である。)